

五年前の或夕、日がとつぶり暮れてから、私の門前
成宗の田園をぐる／＼めぐつて、
へたどり着いた未知の青年があつた。出て
遙ふと、ああうれしい、やつとわかつた。
ではこれで失礼します。

誰です、と問うたら、余市から出て来た
アイヌの青年、達星滝次郎といふものです。
と答へて、午後三時頃、成宗の停留場へ降
りてから、五時間ぶつ通しに成宗を一戸一
戸あたつて尋ね廻つて、足が餘りよどれて
上れない、といふのであつたが、兎に角上
つてもらつた。

これが和洋の通じ合ひ物貿易が最も盛んである西川光次郎氏の北遊の途次に知られ、その引で、市場協会の見沢氏をたよつて上京し、協会へ勤めて四十余円を給せられながら真面目に働くてゐる青年であつたが、アイヌに関する疑問を山ほど持つて来て、何もかも種から合点しようとする真剣な熱烈な会談が、それから夜中まで続いたことであつた。

それ以来、私は、労働服の達星青年の姿を、学会に、講演会に、ありとある所に見受ける様になつた。かうした一年有余の時の流は、偶々達星生を、虐げられた半生の苦酸から引こ抜き、執拗に追ひ廻す差別待遇の答から解放して、世界を一変させた。

私のほどの者なら、東京には有り餘る程ゐる。そして失業の失職の生活難のといつてゐる時に、半人前も仕事の出来ぬ私が、一人前の俸給をもらって納つて居られるのは、ただ私がアイヌだからである。

私の様な者が、学会の会合へ交れたり、大きな会館で銀の匙やフォーケで御馳走になつたりする、この幸福も、やつぱりただ私がアイヌだからである。

私が若し和人であつたら、協会のあの仲間並に、ああいふ手合とああして暮すだけの事、誰がこんな殊遇を与へられよう。アイヌであつたからこそだ。待て、待て、「アイヌだから」といふ差別待遇を抗拒し、悲憤して来た自分ぢやなかつたか。「アイヌだから」のこの特殊の待遇を甘受してゐて私は済むか?

まばらに各地に生残る。そして今に地上に姿を没せんとするあはれ同族よ。なつかしい未だ見ぬ村々の翁達よ、乙女達よ。そして今頃は我が如き考へに共鳴する青年もそこそこに涙をしぼつて暮してゐはせぬか? 無縁の東京人すら熱中してゐる同族の事を自ら卑下して知らうとはせず、に和人に成りすましてゐた恥かしさよ!

を落して止まうとなかつた。私が声をかけなかつたら、彼はこの山の落葉松の一切を落しつくまで止めなかつたかも知れない。

「先生、私の考えが浅かつたのです」突然彼はこう言い出した。「アイヌが無自覚なんです。我々民族のどこにも立ち上る意気がないのです。和人が悪いのじない、我々の意気地なしが悪いんだ……」こういう彼の声は泣いているかの如くふるえていた。私はアイヌに生まれたことが悲しかつた。然しもう悲しまない。私はアイヌなんかいう體に閉じこもつていいやいけない。ソシタスを召喚する。私は大丈夫

北斗の歌ごえ

北斗は、世間に殆ど知られていない。私なども、北斗については啄木的諧調を示したいくらかの作品が遺つてゐるという程度のことしか知つてない。しかし今、木呂子氏から促されて北斗を識つてよかつたと思うし、またもつともつと識つてよいと思つてゐる。

北斗は余市コタンの豪族の生まれだ。だが、コタンという特殊な社会環境に在つたためであらうか、わざか尋常六年卒業程度の教育しかうけていない。年譜をたゞぐみると、若冠十五、六歳で木材の事業場や鰯場の出稼ぎに行つていることが知られる。当時、日本の家庭でも中産階級以下の庶民の子弟は、尋常科を卒業すると商家の立派な子弟として見做された。丁稚奉公にやられたり、町工場の見習工に

小田邦雄

スッカリ地を覆つて、秋気は天地に満ち満ちていた。人里遠い山の中で、我々二人は切株に坐しつつ自然の呼吸に自らの呼吸を合わせ、人生の意義をおもいめぐらした。私は「森林に自由存す……」とうたつた詩人のこころの韻律を、今さらの如く、自らのうたごころの上にのせてみたのだつた。「先生、これはどうでしよう」しばらく経つてから、彼はノートをひきちぎつた紙片へ何かを書いてつき出した。それには俳句が一つ書かれてあつた。
枯れ葉みな抱かれんとて地へ還る

を落して止まうとなかつた。私が声をかけなかつたら、彼はこの山の落葉松の一切を落しつくまで止めなかつたかも知れない。

「先生、私の考えが浅かつたのです」突然彼はこう言い出した。「アイヌが無自覚なんです。我々民族のどこにも立ち上る意気がないのです。和人が悪いのじない、我々の意氣地なしが悪いんだ……」こういう彼の声は泣いているかの如くふるえていた。私はアイヌに生まれたことが悲しかつた。然しもう悲しまない。私はアイヌなんかいう體に閉じこもつていいやいけない。ソシタスを召喚する。私は大丈夫

スッカリ地を覆つて、秋気は天地に満ち満ちていた。人里遠い山の中で、我々二人は切株に坐しつつ自然の呼吸に自らの呼吸を合わせ、人生の意義をおもいめぐらした。私は「森林に自由存す……」とうたつた詩人のこころの韻律を、今さらの如く、自らのうたごころの上にのせてみたのだつた。「先生、これはどうでしよう」しばらく経つてから、彼はノートをひきちぎつた紙片へ何かを書いてつき出した。それには俳句が一つ書かれてあつた。
枯れ葉みな抱かれんとて地へ還る

だ。彼の在京時代は常識的に言えば、最も幸福な時代とも言える。アイヌ人という特殊な存在は興味をもつてみられ、世間的には甚だ好遇されたと言ひ得よう。しかし青年期に達した北斗は東京という都市生活のなかで思想的にも人間的にも成熟していくたらしい。金田一博士に会つたのもその当時のことだ。日本のアイヌ保護政策に疑惑をいだき、自民族の在り方についても内的な希求を生じた。こうして北斗は庇護をうけっていた市場協会の高見沢氏の在京のすすめを拒否して自らをコタタン人として再生せしめるためにアイヌ・モシリに戻ってきた。彼の言葉に従えば——アイヌの復興はアイヌがしなくてはならない——ものだつた。彼の眞の面目は、それ以後、死に到るわざか数年間にみることができよう。

滅びゆくアイヌの為めに起つアイヌ
達星北斗の瞳輝く

如何にも青年らしい壮大な氣を吐いていることが知られる。この熱情が北斗を驅りたてたとも言い得よう。

「アイヌ研究したら金になるか」と聞く人に「金になるよ」とよく云つてやつた

今時のアイヌは純でなくなつた
憧憬のコタンに悔ゆる此の頃

北斗はウタリ一の解放を求めて、生涯をかけたが、報いられるものはウタリ一の無理解の眼であつた。彼のこれらの歌どえはかなり弱い。味けなきをどうすることも出来なかつたものらしい。纖細な感性の持主だけに堪え得るものではなかつたであろ。

だ。彼の在京時代は常識的に言えば、最も幸福な時代とも言える。アイヌ人という特殊な存在は興味をもつてみられ、世間的に甚だ好遇されたと言い得よう。しかし青年期に達した北斗は東京という都市生活のなかで思想的にも人間的にも成熟していくらしい。金田一博士に会つたのもその当時のことだ。日本のアイヌ保護政策に疑惑をいだき、自民族の在り方についても内的希求を生じた。こうして北斗は庇護をうけていた市場協会の高見沢氏の在京のすすめを拒否して自らをコタン人として再生せしめるためにアイヌ・モシリに戻つてきた。彼の言葉に従えば――アイヌの復興はアイヌがしなくてはならない――ものだつた。彼の眞の面目は、それ以後、死に到るわざか数年間にみることができよう。

滅びゆくアイヌの為めに起つアイヌ
達星北斗の瞳輝く

如何にも青年らしい壮大な氣を吐いていることが知られる。この熱情が北斗を驅りたてたとも言ひ得よう。

「アイヌ研究したら金になるか」と聞く人に「金になるよ」とよく云つてやつた

今時のアイヌは純でなくなつた
憧憬のコタンに悔ゆる此の頃

北斗はウタリ一の解放を求めて、生涯をかけたが、報いられるものはウタリ一の無理解の眼であつた。彼のこれらの歌ごえはかなり弱い。味けなさをどうすることも出来なかつたものらしい。纖細な感性の持主だけに堪え得るものではなかつたであろう。

彼は知人の後藤氏宛の手紙の中で「保護と云ふ美名に拘束され、自由の天地を失つた」と

だ。彼の在京時代は常識的に言えば、最も幸福な時代とも言える。アイヌ人という特殊な存在は興味をもつてみられ、世間的に甚だ好遇されたと言い得よう。しかし青年期に達した北斗は東京という都市生活のなかで思想的にも人間的にも成熟していくらしい。金田一博士に会つたのもその当時のことだ。日本のアイヌ保護政策に疑惑をいだき、自民族の在り方についても内的な希求を生じた。こうして北斗は庇護をうけ、いた市場協会の高見沢氏の在京のすすめを拒否して自らをコターン人として再生せしめるためにアイヌ・モシリに戻ってきた。彼の言葉に従えば——アイヌの復興はアイヌがしなくてはならない——ものだつた。彼の眞の面目は、それ以後、死に到るわざか数年間にみることができよう。

滅びゆくアイヌの為めに起つアイヌ
達星北斗の瞳輝く

如何にも青年らしい壮大な氣を吐いていることが知られる。この熱情が北斗を驅りたてたとも言ひ得よう。

「アイヌ研究したら金になるか」と聞く人には、「金になるよ」とよく云つてやつた

今時のアイヌは純でなくなつた憧憬のコタンに悔ゆる此の頃

北斗はウタリ一の解放を求めて、生涯をかけたが、報いられるものはウタリ一の無理解の眼であつた。彼のこれらの歌どえはかなり弱い。味けなきをどうすることも出来なかつたものらしい。纖細な感性の持主だけに堪え得るものではなかつたであろう。

彼は知人の後藤氏宛の手紙の中で「保護と云ふ美名に拘束され、自由の天地を失つて忠実な奴隸を余儀なくされたアイヌ」と悲哀の情を述べているが、彼自身は自民族解放のために、現実の改革を考えるような歌人ではなかつた。その意味で北斗は、革命家とは言ひ得ない。彼は一個の精神革命家として、コタン人の一人々々に己れの志を理解せしめることであつた。彼の生涯の事業であつたコタン巡礼はこういうものとして理解してよいのであるう。

彼は若く二十九歳で逝つた。

滅亡に瀕するアイヌ民族にせめてよ生きよ俺の此の歌

落葉

胆振に日高に、眠れる部落のそちこちにその多感な姿を現はしたのは。
しかしながら「現実」は明るい銀燭の中で夢みたやうなものは無かつた。都人士の好意に満ちた温顔と、急設のやうに送られた拍手の代りに、部落で逢ふ所のものは、冷々、無表情な、「こそ面白くもない。どこの馬の骨か、何用があつて來たんだ」と白眼視する気むづかしい目と、黙殺と、無理解な嘲笑とであつた。

それも堪へ切れない違星生ではなかつたが、併し違星生といへども、何より先に食はねばならなかつた。やはらかに人間愛にいつふるへたその手が抗拒されて、折角はいつて行つた村々では、終日土工に交つて鶴巣

○
震いながら一年の、身体を虐待した放浪の後、多感の青年は、病骨を母なき故郷の兄の家へ横たへる身となつた。時折在京の故人へ病床遙に忍苦の歌を寄せて、今生にせひ今一度皆様にお目にかかりたいといひいひ、遂に三十歳の春を見ず永遠に冷えてしまつたのである。

彗星の如く現はれて、彗星の如く永久に消えて行つた達星生、ふと指を折つて見たる今日が、丁度其の七十五日であつた。(昭和四年四月十日東京日日新聞)

違星北斗

註 彼の臨終の際、枕頭のポストンバッグの中から出て来た墨書による自撰歌集で、表紙に北斗帖と題されている。

私の短歌

私の歌はいつも論説の二、三句を並べた様にゴツゴツしたものばかりである。叙景的なものは至つて少い。一体どうした訳だらう。公平無私とか、ありのままにとかを常に主張する自分なのに、歌に現はれたところは、まつたくアイヌの宣伝と弁明とに他ならない。それに幾多の情実もあるが、結局現代社会の欠陥が然らしめるのだ。そして住心地よい北海道、争闘のない世界たらしめたい念願が逆り出るからである。ことさらを作る心算で、個性を無視した虚偽なものは歌ひたくないのだ。

私はただアイヌのために起つアイヌ達星北斗の贊輝く新聞でアイヌの記事を読む毎に切に苦しき我が思かな

アイヌとして生きて死にたい願もてアイヌ絵を描く淋しい心天地に伸びよ 肴えよ 誠もてアイヌの為めに氣を擧げんかな

深々と更け行く夜半は我ほしもウタリー思ひて泣いてありけりほろ／＼と鳴く虫の音はウタリーを思ひて泣ける我にしらぬか

ガッチャキの薬を売つたその金で十一州を視察する俺 昼飯も食はずに夜も尙歩く売れない薬で旅するつらさ

世の中に薬は多くあるものをなどガッチャキの薬売るらん ガッチャキの薬をつける術なりと北斗の指は右に左に

売れる俺も買ふ人もガッチャキの薬の色の赤き顔かな

「ガッチャキの薬如何」と人の居ない峠で大きな声出して見る ガッチャキの薬屋さんのホヤホヤだ吠えて呉れるな黒はよい犬 「ガッチャキの薬如何」と門に立てばせら笑つて断られたり

感情と理性といつも喧嘩して可笑しい様な俺の心だ
俺でなげや金にもならず名譽にもならぬ仕事を誰がやらうか
「アイヌ研究したる金になるか」と聞く人に「金になるよ」とよく云つてやつた
金儲けでなくては何もしないものときめてる人は俺を咎める
よつばどの馬鹿でもなれりや歌なんか詠まない様な心持不図する
何事か大きな仕事ありやいいな淋しい事を忘れる様な
金ためたただそれだけの人間を感心してゐるコタンの人々

馬鹿話の中にもいつか思ふことちよい／＼出して口噤ぐかな
情ない事のみ多い人の世よ泣いてよいのか笑つてよいのか
砂糖湯を呑んで不図恩ふ東京の美好野のあの汁粉と粟餅
甘党の私は今はたまに食ふお菓子につけて思ふ東京

支那蕎麦の立食をした東京の去年の今頃楽しかつたね
上京しようと一生懸命コクワ取る売つたお金がどうも溜らぬ
生産的仕事が俺にあつて欲しい徒食するのは恥しいから
葉書きへ買ふ金なくて本意ならず御無沙汰をする俺の貧しさ

無くなつたインクの瓶に水を入れて使つて居るよ少し淡いが
大漁を告げようとゴメはやつて來た人の心もやつと落ち着く
亦今年不漁だつたら大へんだ余市のアイヌ居られなくなる
今年こそ乗るかそるかの瀬戸際だ鯨の漁を待ち構へてる

或時はガッチャキの薬の行商人今鮫場の漁夫で働く
今年こそ鯨の漁もあれかしと見渡す沖に白鷗飛ぶ
東京の話で今日も暮れにけり春浅くして鯨待つ間を
求める環境に活きて淋しさもそのまま楽し涙も嬉し

人間の仲間をやめてあの様にゴメと一緒に飛んで行きたや
ゴメゴメと声高らかに歌ふ子も歌はるゴメも共に可愛や
カッケイやアカンベの花咲きましたシリバの山の雪は解けます
赤いものの魁だ！とばかりにアカンベの花真赤に咲いた

名の知れぬ花も咲いてた月見草も雨の真晝に咲いてたコタン
脈かさに飢ゑて居た様な此の町は旅芸人の三味で浮き立つ

田舎者の好奇心に売つて行く呼吸もやつと慣れたこのごろ
よく云へば世渡り上手になつて来た悪くは云へぬ俺の悲しさ

此の次は權太視察に行くんだよさう思つては海を見わたす
「今頃は北斗は何處に居るだらう」噂して居る人もあらうに
灰色の空にかくれた北斗星北は何れと人は迷はん

空腹を抱へて雪の峠越す達星北斗を哀れと思ふ

世の中にガッチャキ病はあるものをなどガッチャキの薬売れない
背広服生れて始めて著て見たりカラ一とやらは窮屈に覺ゆ

無自覚と祖先罵つたそのことを済まなかつたと今にして思ふ
仕方なくあきらめるんだと云ふ心哀れアイヌを亡ぼした心

アイヌ相手に金儲けする店だけが大きくなつてコタンさびれた
握り飯腰にぶら下げ出る朝のコタンの空に鳴く鳶の声

ああアイヌやつぱり恥い民族だ酒にうつつをぬかす其の態
泥酔のアイヌを見れば我ながら義憤も消えて憎しみの湧く

背広服生れて始めて著て見たりカラ一とやらは窮屈に覺ゆ
ネクタイを結ぶと覗くその顔を鏡はやはりアイヌと云へり
我ながら山男なる面を撫で鏡を伏せて苦笑するなり

洋服の姿になるも悲しけれあの世の母に見せられもせで
獰猛な面魂をよそにして弱い淋しいアイヌの心

力ある兄の言葉に励まされ涙に恥い父と別れる
コタンからコタンを巡るも樂しけれ 絵の旅 詩の旅 伝説の旅

暦無くとも鰐来るのを春としたコタンの昔慕はしきかな
久々で熊がとれたが其の肉を何年ぶりで食うたうまさよ

雨降りて静かな沢を炭がまの白い煙が立ちのぼる見ゆ
戸むしるに紅葉散り来る風ありて小屋いつばいに烟まはれり

ひら／＼と散つた一葉に冷めたい秋が生きてたコタンの夕
桂木の葉のない梢天を衝き日高的山に冬は迫れる

楽んで家に帰れば淋しさが漲つて居る貧乏な爲だ
戸むしるに紅葉散り来る風ありて小屋いつばいに烟まはれり

ひら／＼と散つた一葉に冷めたい秋が生きてたコタンの夕
桂木の葉のない梢天を衝き日高的山に冬は迫れる

山中のどんな淋しいコタンにも酒の空瓶たんと見出した
倫落の姿に今は泣いて居るアイヌ乞食にからかふ子供

子供等にからかはれては泣いて居るアイヌ乞食に顔をそむける
アイヌから偉人の出ない事よりも一人の乞食出したが恥だ
アイヌには乞食ないのが特徴だそれを出す様な世にはなつたか

滅亡に瀕するアイヌ民族にせめては生きよ俺の此の歌
ウタリーは何故滅び行く空想の夢より覚めて泣いた一宵

単純な民族性を深刻にマキリもて彫るアイヌの細工
アイヌには熊と角力を取る様な者もあるだる数の中には

悪辣で宋えるよりは正直で亡びるアイヌ勝利者なるか
俺の前でアイヌの悪口云ひかねてどぎまぎして居る態の可笑しさ

うつかりとアイヌ嘲り俺の前より悪気に云ひ直しする
アイヌと云ふ新しくよい概念を内地の人人に与へたく思ふ

誰一人知つて呉れぬと思つたに慰めくれる友の嬉しさ

夜もすがら久しうぶりに語らひて友の思想の進みしを見る
それにまた遺瀬ながらう淋しからう可愛さうだよ肺を病む友

カムチャッカの話しながら林檎一つを二つに割りて仲よく食うた
母と子と言ひ争うて居る友は病む事久し荒んだ心

それにまた遺瀬ながらう淋しからう可愛さうだよ肺を病む友

おとなしい惣次郎君銅羅声で「カムチャッカでなあ」と語り続ける

一升飯食へる男になつたよと漁場の便りを友に知らせる
久々に荒い仕事をする俺のてのひら一ぱい痛いまめ出た

働いて空腹に食ふ飯の味ほんとにうまい三平汁吸ふ

骨折れる仕事も慣れて一升飯けろりと食べる俺にたまげた

一升飯食へる男になつたよと漁場の便りを友に知らせる

仕事から仕事追ひ行く北海の荒くれ男俺もその一人

雲よ飛べ風よ刺せ何糞北海の男児の胆を練るは此の時
沙流川は昨日の雨で水滿りコタンの音騒ぎつ行く

沙取はアイヌの旧都懷み義経神社で尺八を吹く
尺八で追分節を吹き流し平取橋の長きを渡る

崩御の報二日も経つてやつと聞く此の山中のコタンの驚き

諒闇の正月なれば喪旗を吹く風も力のなき如く見ゆ

勅題も今は悲しき極みなれ昭和二年の淋しき正月

秋の夜の雨もる音に目をさまし寐床片寄せ樽を置きけり

貧乏を芝居の様に思つたり病氣を歌に詠んで忘れる

一雨は淋しさをよび一雨は寒さ招くか蝦夷の九月は

病よ悲しみ苦しみそれもよいそ死んだがよしとも思ふ

若しも今病氣で死んで了つたら私はいいが父に気の毒

恩師から慰められて涙ぐみそのまま挾む今日のお便り (後藤靜香氏)

元より俺は良い男だ、人も許し我も信じておたのを何たる不都合ぞ? 鏡が。鏡が。

オキクルミ。TUREHI トレンマ悲し沙流川の昔をかたれクンネチュップよ
やさしげにまた悲しげに唱はれるヤイサマネイナに耳傾ける

○面影は秋の夜寒に啼く虫の声にも似てるヤイサマネイナ
アイヌ相手に金もうけする店だけが大きくなつてコタンさびゆく

○曆なくとも鮭来るときを秋としたコタンの昔したはしいなあ

正直で良い父上を世間では馬鹿正直だとわらつてやがる
アイヌ相手に金もうけする店だけが大きくなつてコタンさびゆく

アイヌを食ひものにした野蕃人は内地で食ひつめたシャモ

ノクタイを結ぶに伸べたその顔を鏡は俺を。アイヌと云ふた

野原をコタンに拓き、コタンはシャモの村となり、村はいつしか町となつた。原始の姿。
今は何處? 山は開かれ野は耕され、岸埋め立て家は建つ。神秘の光をかき消し、悠久
の歴史をうつたではないか。隕け? ほぐるまの音、それは征服者の勝利を讃ふ……

岸は埋め川には橋がかかるともアイヌの家が朽るが痛ましい
アイヌがナゼほろびたらうと空想のゆめからさめて泣いた一夜さ

島泊村のアイヌは彫もない。どこへ行つたか? (六月二十一日)

○アヌタリ(同族)の墓地であつたと云ふ山もとむらふ人ない熊笹のやぶ
その土地のアイヌは皆死に絶えてアイヌのことをシャモにきくのか

古平町にはもう同族はない。只だ沿史の幾箇かに名残を止めてゐるにすぎない。なん
と云ふ悲しいことであらう (六月二十二日)

○アヌタリ(同族)の墓地であつたと云ふ山もとむらふ人ない熊笹のやぶ
朝寝坊の床にも聽かれるコタンでは安々きかれるホトトギスの声

無茶苦茶に茶目氣を出してはしゃいだあとしんみりと淋しさにをそはる

熊の胃で助かつたのでその子に熊雄と名附けし人もあります

酒故か無智故かは知らないが見世物のアイヌ連れて行かれた

利用されるアイヌもあり利用するシャモもあるんだ共に憚れむ

つづくと俺の弱さになかされてコタンの夜半を風に吹かれた

ともすれば下手かたまりにかたまりてひとりよがりの俺の愚かさ

逃げ出した豚を追つかけて笑つたたそれがれどきのコタンにぎやか

そばの花雪かとまがう白サモで太平無事に咲てたコタン

静かアなコタンであるがお盆だでぼん踊りあり太鼓よくなる

汽車は今コザハトンネルくぐつたふとこの山の昔しを偲ぶ

○だち悪くなれ? と云ふ心哀れアイヌをして云ふこと似てゐる

卑屈にも慣らされてゐると哀れにもあきらめに似た楽しみもある

限りないその寂寥をせめても悲惨な酒にまぎらはしものを

いとせめて酒に親しむ同族にこの上とても酒呑ませたい

現実の苦と引き替へに魂を削るたから似ても酒は魔だ!

○ホロベツの浜のはまなす咲き匂ひイサンの山の遠くかすめる

沙流川はきのふの雨でごつてコタンの昔をささやく流れ

コタンの夜半人があるのかかるのかみ悪い程静けさに包まる

「末世人間の堕落を借り人間の國土を見捨てオキタルミ神威は去つてしまつた。けれど

も妹にあたる女神がアイヌの國土を櫻ひ泣くと云ふ。神にすてられたアイヌは限りなき

悲しみ盡きぬ悔恨である。今宵この沙流川邊に立つて女神の自殺の神曲を想ひ、ケント

チュップ(月)に無量の感激が湧く (大正十五年七月二十五日)

我乍ら毛むくじやらなるつらをなで鏡を伏せて苦がわらひする
いつしかに夏の別れよポン踊りの太鼓の音もうら寒いコタン
ひと雨は淋しさをばひと雨は寒さを呼ぶか蝦夷地の九月
桂木の葉のない梢天を突き日高の山に冬が迫つた

幽谷に風嘯ぶいて黄もみぢが苦踏んで行く俺にかぶさる
鉄道がシモケホまで通つたので汽車を始めて見る人もある
のむ? ことが何よりのたのしみで北海道がよいと云ふシャモ
ウッカリとアイヌの悪口云つた奴きまり悪るげに云ひなほしする

北海道は特色がある。曰く「おめ(改)まだあの男と連添てるの……? まあかいネイ
……おら三人目だハイ」これがアツバタのアネ子たちの話。だがヤン衆になるとまだひ
どい。これがわが北海道の尊敬すべき開拓者か。

借りたもの一回毎に返済たら内地と同ソなじだべと平氣だ

これがシャモだいはんやアイヌにおいておやだまされる慣れるに於ておやだ
歓樂も悲哀もなくて只だ單に生きんが為にうよめける群

アイヌとして生きて死にたい願もてアイヌ画をかく淋しいようろこび

○今時のアイヌは純でなくなつた憧憬のコタンにくゆる此の頃
希望! ああ希望に鞭うつて泣いてゐないで飛出して行け

シャモになる前にひとまづ堂々とアイヌであれと鉄腕を振る

○人間の誇は如何で枯るべき今こそアイヌの此の声をかけ
○正直なアイヌだましたシャモをこそ慣れなものとゆるすこの頃
アイヌ! と只一言が何よりの侮辱となつて憤怒に燃ゆ

ナニッ糞でも喰らへと剛放にどなつたあとと淋しーい静

言葉本來の意味は久しく忘れられてナンたる侮辱の代名詞になつてゐることであらう——
過渡期だ一世の浮薄な概念を一蹴するために故意に「俺はアイヌだ」と言つてのける

——反動思想だ——自分では何も彼も分つてゐながら……また修養が足りない……不甲斐
なさを自嘲する。

○淋しいか? 俺は俺の願ふことを願のままに歩んだくせに
○開拓の労働者の名のかけに脅威のアイヌをのいてゐる
○不景氣は木のない山を追つて行く追れるやうに原始林伐られる

美術は慰安である。その製品は生活費としてかすかに助けてゐたのだ。然るにこの幾何にも
ならないアイヌ細工は今やどうなつてゐるか。あくことなき魔の手は、アイヌの手から
さへアイヌ細工を奪つてしまつた。信州の山中に、札幌に、函館に、小樽に、而もシャモ
の手に依つて製作されて、それが現代のアイヌ細工であるとは……。

コタン吟補遺

註 昭和一年北斗の手による雑誌「コタン」のコタン吟にあつて「しづく」のコタン吟にもれ

単純な民族性を深刻にマキリで彫るアイヌの細工
○強きもの! それはアイヌの名であつた。昔に恥よ醒めよ同族カタリ
○勇敢を好み悲哀を愛してたアイヌよアイヌ今どこにある
○俺はただアイヌであると自覚して正しい道を踏めばよいのだ
○悲しむべし今のアイヌは己れをば卑下しながらにシャモ化して行く
罪もなく憾もなくて只たんにシャモになること悲痛なことよ
○アイヌの中に隔世遺伝のシャモの子が生れることをよろこぶ時代
○不義の子でもシャモでありたい○○子の心のそこに泣かされるなり
正直が一番偉いと教へた母がなくなつて十五年になる

余市のお邊カタリ語る人なく消る傳説……

伝説のベンケイナツボの磯のへにごめがないてたなつかしいかな
○シリバ山もしそにからむ波だけが昔しを今にひるがへしてゐる
シャモの名でなんと言ふのか知らないがケマフレ(足赤)テ鳥は罪がなさそだ
人様の浮世は知らず、今日もまた沖でかもめの声にたはむる
不器用とは俺でございと云ふやうな音やかましい發動機船
増毛山雪頂いて海のあなたシベリヤ風に突立つてゐる
ひらひらと散つた一葉に冷めたアい秋が生きてたコタンの秋だ
凸凹のコタンの道の砂利原を言葉そのままのがた馬車通る
○シャモと云ふ小さな殻で化石した優越感でアイヌ見に来る
だけ惜みも腹いせも今はいだ日本に幸あれと祈る
はしたないアイヌだけれど日の本に生れたことの仕合せを知る
○堂々と「俺はアイヌだ」とさけぶのも正義の前にたつたよろこび
アイヌは单なる日本人になるじやない神ながらの道に出て立つ!
まづ惜みも腹いせも今はいだ日本に幸あれと祈る

日本に己惚てるるシャモ共の優越感をへし折つてやれ
雪よ飛べ風を刺せナニクソ北海の男児の胆を練磨するんだ!

ゴメゴメと声高らかに唱ふ子もたはれる鷗も春のはこりよ

同化への過渡期

不義の子でもシャモでありたいその人の心の奥に泣かされるなり

やたらにシャモの偉さをありまはして低級なシャモの小面にくし
悔い哉!

淋しいか？俺は俺の願ふことを願のままに歩いてるくせに
アイヌは单なる日本人になるなかれ神ながらなる道にならへよ

淋しい元氣

違 星 北 斗

浮水鶴が乗つて流れけり
春めいて何やら嬉し山の里
大漁の旗そのままに春の夜
春浅き鯉の浦や雪五尺
鯉舟の囮ほぐしや春浅し
尺八で追分吹くや夏の月
夏の月野風呂の中で碎けけり
蛙鳴くコタンは暮れて雨しきり
伝説の沼に淋しき蛙かな
偉いなと子供歌ふや夏の月
新聞の廣告も読む夜長かな
夜長さや二仲と書いて又一句
外國に雁見て思ふ故郷かな
雁落ちてあそこの森は暮れにけり
十一州はや訪れぬ初あられ
まづ今日の日記に書かん初霰
雪除けや外で受け取る新聞紙
流れ水流ながらに凍りけり
塞翁の馬で今年も暮れにけり
雪空に星一つあり枯木立
枯れ葉な地に抱かれんと地へ還る

疑ふべきフコツペ遺跡

（拔萃）

讀まない文字

その昔、シャモ（和人）とアイヌが物々
交換をやつた頃は「始まり」と一本づつ
をごまかされたといふ有名な話があるが：
：然しそれでも「十よ」といへば、繩に結
び目一つ加へて記録に表示したといふ。こ
れを学者は結繩文字と名附けてゐる。

我々は文字といへば、直に読むものと思
つてゐたに、読まない文字があつた。原始
絵画がそれである。また言語といへば声を
使ふことのみと思はれやすいが、全然声を
要せない言葉がある。言語学者の説を請充
りするまでもなく身振語である。數理にう
といアイヌが記憶の継続を計るために發明
した記号は Toppashiroshi というて、單
に繩ばかりでなく、棒に刻目を彫けて明確
を期したといふ。私は仮にトップ文字と命
名しておく。世界文明史に一大進歩の足跡
を印することの出来た文字でも、その先駆

シロシ（エカシ・老翁、シロシは記号）と
いふのと、フチシロシ（フチは嫗）といふ
のである。その起原については未だ研究し
尽されてゐないが、やはりリトッパ文字の本
質より発生して案出されたものであらうと
い。丁度声を使はない言葉に身振語がある
呼び起すために案出された一種の記憶術で
あつて、自分より外には判ずることも出来
なければ無論読むことは出来やうはずはな
い。丁度声を使はない言葉に身振語がある
やうに読まないトッパシロシが原始的アイ
ヌ文字は、思想の伝達一言葉を写す符号
ーとまで発達しなかつた。ただ単に記憶を
持つて歩き一日暮すと件の棒に一つ刻み目
をなしたものはやはり単純なトッパ文字式
のものより起り、絵画や象徴的記号が時代
と共に発達したことは事実である。

アイヌのトッパ文字について面白い一例
アイヌの復興はアイヌがしなくてはならない
強い希望に啖かされ、嬉しい東京を後にし
て、再びコタンの人となつた。今もアイヌ
の為に、アイヌと云ふ言葉の持つ悪い概念
を一蹴しようと、「私はアイヌだ！」と逆宣
伝的に叫びながら、淋しい元氣を出して闘
ひ続けて居る。此の念願の下に、強固な意
志を持つて、眞に生甲斐を感じながら。

外観、最も文字に似てゐるものでエカシ

シロシ（エカシ・老翁、シロシは記号）と
いふのと、フチシロシ（フチは嫗）といふ
のである。その起原については未だ研究し
尽されてゐないが、やはりリトッパ文字の本
質より発生して案出されたものであらうと
い。丁度声を使はない言葉に身振語がある
やうに読まないトッパシロシが原始的アイ
ヌ文字は、思想の伝達一言葉を写す符号
ーとまで発達しなかつた。ただ単に記憶を
持つて歩き一日暮すと件の棒に一つ刻み目
をなしたものはやはり単純なトッパ文字式
のものより起り、絵画や象徴的記号が時代
と共に発達したことは事実である。

カシシロシはそれに対する男子専用のもの
者とも先祖が伝へ残したもので現世と死後
の世界へかけて大なる働きを持つてゐる。
青春の希望に燃ゆる此の我にあ誰か此の悩みを与へし
いかにして「我世に勝てり」と叫びたるキリストの如安きに居らむ
世の中は何が何やら知らねども死ぬ事だけはたしかなりけり

（拔萃）

外観、最も文字に似てゐるものでエカシ

シロシ（エカシ・老翁、シロシは記号）と
いふのと、フチシロシ（フチは嫗）といふ
のである。その起原については未だ研究し
尽されてゐないが、やはりリトッパ文字の本
質より発生して案出されたものであらうと
い。丁度声を使はない言葉に身振語がある
やうに読まないトッパシロシが原始的アイ
ヌ文字は、思想の伝達一言葉を写す符号
ーとまで発達しなかつた。ただ単に記憶を
持つて歩き一日暮すと件の棒に一つ刻み目
をなしたものはやはり単純なトッパ文字式
のものより起り、絵画や象徴的記号が時代
と共に発達したことは事実である。

カシシロシはそれに対する男子専用のもの
者とも先祖が伝へ残したもので現世と死後
の世界へかけて大なる働きを持つてゐる。
青春の希望に燃ゆる此の我にあ誰か此の悩みを与へし
いかにして「我世に勝てり」と叫びたるキリストの如安きに居らむ
世の中は何が何やら知らねども死ぬ事だけはたしかなりけり

（拔萃）

外観、最も文字に似てゐるものでエカシ

シロシ（エカシ・老翁、シロシは記号）と
いふのと、フチシロシ（フチは嫗）といふ
のである。その起原については未だ研究し
尽されてゐないが、やはりリトッパ文字の本
質より発生して案出されたものであらうと
い。丁度声を使はない言葉に身振語がある
やうに読まないトッパシロシが原始的アイ
ヌ文字は、思想の伝達一言葉を写す符号
ーとまで発達しなかつた。ただ単に記憶を
持つて歩き一日暮すと件の棒に一つ刻み目
をなしたものはやはり単純なトッパ文字式
のものより起り、絵画や象徴的記号が時代
と共に発達したことは事実である。

カシシロシはそれに対する男子専用のもの
者とも先祖が伝へ残したもので現世と死後
の世界へかけて大なる働きを持つてゐる。
青春の希望に燃ゆる此の我にあ誰か此の悩みを与へし
いかにして「我世に勝てり」と叫びたるキリストの如安きに居らむ
世の中は何が何やら知らねども死ぬ事だけはたしかなりけり

（拔萃）

外観、最も文字に似てゐるものでエカシ

シロシ（エカシ・老翁、シロシは記号）と
いふのと、フチシロシ（フチは嫗）といふ
のである。その起原については未だ研究し
尽されてゐないが、やはりリトッパ文字の本
質より発生して案出されたものであらうと
い。丁度声を使はない言葉に身振語がある
やうに読まないトッパシロシが原始的アイ
ヌ文字は、思想の伝達一言葉を写す符号
ーとまで発達しなかつた。ただ単に記憶を
持つて歩き一日暮すと件の棒に一つ刻み目
をなしたものはやはり単純なトッパ文字式
のものより起り、絵画や象徴的記号が時代
と共に発達したことは事実である。

カシシロシはそれに対する男子専用のもの
者とも先祖が伝へ残したもので現世と死後
の世界へかけて大なる働きを持つてゐる。
青春の希望に燃ゆる此の我にあ誰か此の悩みを与へし
いかにして「我世に勝てり」と叫びたるキリストの如安きに居らむ
世の中は何が何やら知らねども死ぬ事だけはたしかなりけり

（拔萃）

外観、最も文字に似てゐるものでエカシ

シロシ（エカシ・老翁、シロシは記号）と
いふのと、フチシロシ（フチは嫗）といふ
のである。その起原については未だ研究し
尽されてゐないが、やはりリトッパ文字の本
質より発生して案出されたものであらうと
い。丁度声を使はない言葉に身振語がある
やうに読まないトッパシロシが原始的アイ
ヌ文字は、思想の伝達一言葉を写す符号
ーとまで発達しなかつた。ただ単に記憶を
持つて歩き一日暮すと件の棒に一つ刻み目
をなしたものはやはり単純なトッパ文字式
のものより起り、絵画や象徴的記号が時代
と共に発達したことは事実である。

カシシロシはそれに対する男子専用のもの
者とも先祖が伝へ残したもので現世と死後
の世界へかけて大なる働きを持つてゐる。
青春の希望に燃ゆる此の我にあ誰か此の悩みを与へし
いかにして「我世に勝てり」と叫びたるキリストの如安きに居らむ
世の中は何が何やら知らねども死ぬ事だけはたしかなりけり

（拔萃）

外観、最も文字に似てゐるものでエカシ

シロシ（エカシ・老翁、シロシは記号）と
いふのと、フチシロシ（フチは嫗）といふ
のである。その起原については未だ研究し
尽されてゐないが、やはりリトッパ文字の本
質より発生して案出されたものであらうと
い。丁度声を使はない言葉に身振語がある
やうに読まないトッパシロシが原始的アイ
ヌ文字は、思想の伝達一言葉を写す符号
ーとまで発達しなかつた。ただ単に記憶を
持つて歩き一日暮すと件の棒に一つ刻み目
をなしたものはやはり単純なトッパ文字式
のものより起り、絵画や象徴的記号が時代
と共に発達したことは事実である。

カシシロシはそれに対する男子専用のもの
者とも先祖が伝へ残したもので現世と死後
の世界へかけて大なる働きを持つてゐる。
青春の希望に燃ゆる此の我にあ誰か此の悩みを与へし
いかにして「我世に勝てり」と叫びたるキリストの如安きに居らむ
世の中は何が何やら知らねども死ぬ事だけはたしかなりけり

（拔萃）

外観、最も文字に似てゐるものでエカシ

シロシ（エカシ・老翁、シロシは記号）と
いふのと、フチシロシ（フチは嫗）といふ
のである。その起原については未だ研究し
尽されてゐないが、やはりリトッパ文字の本
質より発生して案出されたものであらうと
い。丁度声を使はない言葉に身振語がある
やうに読まないトッパシロシが原始的アイ
ヌ文字は、思想の伝達一言葉を写す符号
ーとまで発達しなかつた。ただ単に記憶を
持つて歩き一日暮すと件の棒に一つ刻み目
をなしたものはやはり単純なトッパ文字式
のものより起り、絵画や象徴的記号が時代
と共に発達したことは事実である。

カシシロシはそれに対する男子専用のもの
者とも先祖が伝へ残したもので現世と死後
の世界へかけて大なる働きを持つてゐる。
青春の希望に燃ゆる此の我にあ誰か此の悩みを与へし
いかにして「我世に勝てり」と叫びたるキリストの如安きに居らむ
世の中は何が何やら知らねども死ぬ事だけはたしかなりけり

（拔萃）

外観、最も文字に似てゐるものでエカシ

シロシ（エカシ・老翁、シロシは記号）と
いふのと、フチシロシ（フチは嫗）といふ
のである。その起原については未だ研究し
尽されてゐないが、やはりリトッパ文字の本
質より発生して案出されたものであらうと
い。丁度声を使はない言葉に身振語がある
やうに読まないトッパシロシが原始的アイ
ヌ文字は、思想の伝達一言葉を写す符号
ーとまで発達しなかつた。ただ単に記憶を
持つて歩き一日暮すと件の棒に一つ刻み目
をなしたものはやはり単純なトッパ文字式
のものより起り、絵画や象徴的記号が時代
と共に発達したことは事実である。

カシシロシはそれに対する男子専用のもの
者とも先祖が伝へ残したもので現世と死後
の世界へかけて大なる働きを持つてゐる。
青春の希望に燃ゆる此の我にあ誰か此の悩みを与へし
いかにして「我世に勝てり」と叫びたるキリストの如安きに居らむ
世の中は何が何やら知らねども死ぬ事だけはたしかなりけり

（拔萃）

外観、最も文字に似てゐるものでエカシ

シロシ（エカシ・老翁、シロシは記号）と
いふのと、フチシロシ（フチは嫗）といふ
のである。その起原については未だ研究し
尽されてゐないが、やはりリトッパ文字の本
質より発生して案出されたものであらうと
い。丁度声を使はない言葉に身振語がある
やうに読まないトッパシロシが原始的アイ
ヌ文字は、思想の伝達一言葉を写す符号
ーとまで発達しなかつた。ただ単に記憶を
持つて歩き一日暮すと件の棒に一つ刻み目
をなしたものはやはり単純なトッパ文字式
のものより起り、絵画や象徴的記号が時代
と共に発達したことは事実である。

カシシロシはそれに対する男子専用のもの
者とも先祖が伝へ残したもので現世と死後
の世界へかけて大なる働きを持つてゐる。
青春の希望に燃ゆる此の我にあ誰か此の悩みを与へし
いかにして

